文化論演習Ｉレポート

社会、文化現象としての“LA METAL”ムーヴメント

95E010　荒　木　陽　子

私が現在興味を持っていることは「地域と音楽現象の関わりについて」である。自分の今まで追い掛けてきたことに思入れが強いのは、当然のことであり、私にとってそれは80年代のハード・ロック、ヘヴィー・メタルであったりする。特にその中でも私の関心が強いのが、北欧のハード・ロック、ヘヴィー・メタル、所謂「北欧メタル」や、アメリカ、ロサンゼルスのハード・ロック、ヘヴィー・メタルである「ＬＡメタル」という、地域的偏性を持った80年代の音楽ムーヴメントなのである。今回はこのうち、アメリカのものということで、「ＬＡメタル」について、考えてみたい。

Ｉ．ハード・ロック、ヘヴィー・メタル

いきなり、「ＬＡメタル」といわれても解りづらいと思うので、まずその元となる音楽である、ハード・ロック、ヘヴィー・メタル、について簡単に説明しておこう。

ハード・ロックは、1960年代末、ロックの発展途上に生まれた。その先駆者としては、ジミ・ヘンドリックスやクリームなどがあげられる。アメリカやイギリスで後を追うものが多く、70年代にはロックの主流になった。その、ハード・ロックの分脈が、ヘヴィー・メタルである。より、金属的で重厚なギターの音、スクリーミング、シャウト・タイプのヴォーカル、スウィングしないリズム、等が特徴。レッド・ツェッペリンなどが、60年代のロックの影響を受けて、70年代初期に生み出した。初期の代表は、その外、ディープ・パープル、ブラック・サバスなど。80年代になると、アイアン・メイデンなど、人気バンドが数多く登場。鎖、鋲をあしらった、暴力的ファッションとともに、若者に強くアピールした。ヘヴィー・メタルという呼称は、アメリカのロック評論家がウイリアム・バロウズ著『裸のランチ』から引用し使ったのが最初だという。

これは、『現代用語の基礎知識』の湯川れい子氏の説明を要約したものだが、一般的には、レッド・ツェッペリン直系の子供が、ハード・ロックに、ディープ・パープルの直系の子供がヘヴィー・メタルになったものと考えられる。そして、ヘヴィー・メタルの確立者はジューダス・プリーストである。

Ⅱ．ＬＡメタル

Ｉの項でハード・ロック、ヘヴィー・メタルについてのアウトラインがつかめたものとして話を進めて行きたい。

１．ＬＡメタルとは？

では、これから私たちが見ていこうとしている、ＬＡメタルとは、いったいなんなのだろうか。ここからは、主にヘヴィー・メタル専門誌『ＢＵＲＲＮ！』を資料にしながら紹介してい

こう。

70年代の終わりに、パンクが優勢だったシーンのなかで、自分たちの聴きたい音楽がないから、自分たちで作っていこうとしたイギリスのヘヴィー・メタルファンが作り出したムーヴメントが、ニュー・ウェイヴ・オブ・ブリティッシュ・ヘヴィー・メタル（NWOBHM）であった。

こうして、70年代中盤以降、少し影を潜めていたかに見えたハード・ロック・ヘヴィー・メタルシーンの復興に反応するかのように、80年代の初頭、新たなファンをシーンに取りとこむように起こったのが、ＬＡメタルのムーヴメントであった。

2．ＬＡメタルの特徴

さて、このようなＬＡメタルのムーヴメントの特徴を以下に挙げてみる。

①出身地にかかわらず、ロサンゼルスを拠点に活動していること。

②スリージーなロックン・ロールを主体とした音楽性。

③サウンド以外にも髪形、服装、楽器にまで共通する新鮮な個性。

このように、同じようなスタイルでファッション感覚で発展していったのがＬＡメタル・ムーヴメントなのである。

※②の「スリージーなロックン・ロール」について補足説明。

普通、ハード・ロックやヘヴィー・メタルはどこか気高かったり、洗練されていて、粗野なロックン・ロール色を感じさせることは少ない。ところが、ＬＡメタルに関してはハード・ロックが洗練される過程で失った、ロックン・ロール特有の野卑な安っぽさが、顕著である。

3．音楽性とルックス

２でこのムーヴメントの特徴について、大まかなところを見た。ここでは上の特に、②、③について、音楽性とルックスに関してもう少し掘り下げてみたい。

①音楽性

ＬＡメタル・ムーヴメントは音楽を中心にしたものなので、当然音楽も特徴的である。ムーヴメント中ほとんど全てのバンドに共通する点をとりあげてみる。

(a)ギターの開放弦をうまく使い、コード中に取り込んだ、リフをもとに展開する、ミドル・テンポの曲。

(b)ツイン・ギターのバンドでは、曲のはじめは、一人のギタリストがコードを刻み、Ａメロダッシュにはいると、もう一人のギタリストが加わり、コードのルート音を刻む。二人目のギタリストが入ってくるときには、６弦グリスをしながら、はいってくることが多い。

(c)歌はあまりメロディアスではないが、ポップであり、ファンが一緒に歌える。（ヨーロッパのヘヴィー・メタル、ハード・ロック・バンドではシンガーが技巧的であることが多く、一緒にファンが歌えない。）

(d)ギター・リフ中心の音楽。

(e)ラジオ、ＭＴＶを意識した、３～４分の短い曲が多い。

(f)メジャー・キーの曲が多い。

(g)どのアルバムにも、ヒットねらい（一般リスナーに受け入れられやすい）のパワー・バラー

ドが入っている。
(h)サビのリフと、イントロのリフが同じことが多い。
(i)サビで曲のタイトルを叫ぶ。
(j)ビデオ・クリップに露出度の高い女性が登場する。
(k)歌詞が女性がらみであることが多い。
などの特徴があげられる。

②ルックス

ハード・ロック、ヘヴィー・メタルというのは常にステージ、ライヴを中心に発展していく音楽である。従って、ステージにあがり、いかにステージばえさせて自分たちを見せるかという、ヴィジュアル・イメージもそのバンドの成功に大きな意味を持ってくる。①では、音楽性についてＬＡメタルの特徴をいくつか挙げてみたが、ここではそのルックスについて考えてみたい。

(a)髪形

パーマがかかったロング・レイヤードが主流。ストレート・ヘヤーは少ない。

(b)メイク

女性的で濃い。かならずといっていい程、みなアイラインを入れている。グラム・ロック系が奇抜さをねらったのに対して、ＬＡメタル勢は女性同様、自分を美しく、華やかに見せるためのメイクを狙っている。

(c)服装

派手。エナメル、サテン、革などを使った服が多く、赤、黒などのヴィヴィット・カラーや、アメリカのお菓子のように、とにかく派手で人工的な色で無いことは、稀である。また、首、腰、足、手首、などに、スカーフを巻き付ける人も多い。穴の開いたジーンズのみならず、シャツまで切る。これを“カットＴシャツ”と呼ぶ。

では、何故これらのルックスが蔓延していったのか？　ＮＷＢＯＨＭのアーチストたちと比較してみよう。

まず、ＮＷＢＯＨＭのムーヴメントがイギリスで発生したことを確認してほしい。彼らのファッションは黒いレザー・ジャケット、ストレッチ・ジーンズ、Ｔシャツといった、地味なものであったが、これは、気候的に寒冷なことが多いヨーロッパの普段着をステージにそのまま持ち込んだ形である。彼らの音楽は硬派で質実剛健で、女性ファンは少なく、バンドもまた男たちに向けて男たちが作る音楽を提供していた。いわば“男の音楽”である。彼らの服装はこのスタンスを反映したものではないだろうか。彼らの音楽の念頭には女性の存在は薄く、セックスアピールの必要がない。すると、色気のない彼らのような普段着のステージ衣裳化がでてくるのではないか。彼らのイメージを色に例えるなら、“黒と銀（レザーに打こまれた鋲）”である。

これに対してＬＡのバンドたちは、一年中暖かく、海の近い、開放的なムードの中で、ポップな音楽をもとに女性をもムーヴメントに巻き込んでいった。そう、このムーヴメントの大きな特徴は女性の存在を意識しているという点である。だからこそ、女性に好まれる、華美なルックスを呈し、女性へのラヴ・ソング演奏したのだ。そして、異性を意識した音楽であるから、

他のハード・ロックよりも色っぽく、艶っぽいのだ。そしてそれ故に、一般大衆に広がったのである。なぜなら、愛は万人にとって魅力的なものだからだ。また、人々はこの離婚が急増し、家族が崩壊していった不思議な時代に、特に愛を求めていたとも考えられる。そんなある種不自然で、乾いた時代に、バンドは客に夢とパーティーを提供し、非日常的夢物語を演出し、そのようなヴィデオ・クリップを作り体現していった。そして、そこはいつも美しい女性が登場した。

また、NWBOHMがいわば“解る奴だけ解ればいい音楽”を身上にしていたのに対して、LAメタルはその体質上、外へ外へと拡散していき、大衆的ヒットへと向かっていった。ここにはアメリカ人の“成功したい”という思いの強さも関係していると思うが、この過程のどこかで、目立つための、そして、気候にぴったりとあった露出度の高いファッションが生み出されていったとも考えられる。

また、私はこの異常に飾り立てられたLAメタル的ルックスに物質主義で、美しくあること、若くあることを重視する、アメリカ文化の片鱗を見たような気がする。死体にエンバーミングと称して美しく見えるように加工を施し、ワンダー・ブラで胸を大きく見せ、おいしいものをたらふく食べた後には、ダイエットの薬を飲んだり、高い金を払ってエクササイズに通い、体形を維持し、年を取ってしわができれば整形美容手術を受ける。このような、自然をそのまま受け入れることをよしとしないアメリカ文化の端的なあらわれが、この夢物語的LAメタル的ルックスが象徴しているのではないか。また、この夢物語への憧れ、切望の大きさが、なにかアメリカ人の空虚さを表しているような気がする。自分たちの現実に欠けているものを、フィクションの世界に求めているのではないだろうか。そしてこの空虚さを埋めるために何かを追い求めるから、アメリカからは多くの天才がでるのではないか。彼らはいつも理想を追い掛けることでわずか200年そこそこで、あそこまで巨大な国を打ち建てたのである。

4．ムーヴメントを作り上げたバンドたち

ここまで、ムーヴメント全体の大まかな特徴を見てきた。では、このムーヴメントを築き上げたバンドについて、重要なものをピック・アップして紹介したい。

ムーヴメントの火付け役となったのが、MÖTLEY CRÜEである。彼らは、ニュー・ウエーヴ主流のシーンに80年代初頭、当時としては場違いだったLAメタル的ファッションに身を包み登場し、ベーシストのニッキー・シックスのLONDON時代のコネを生かし、ライヴでの動員を増やしていった。そして、これもまた、LAメタルのバンドたちのよく使った手段、自主制作盤を足掛かりに、大手レコード会社のエレクトラと契約した。

このような方法で、次にデビューをしたのはRATTである。彼らはやや硬派の、というより、レザーに身を包み、むしろバッド・ボーイズ的なMÖTLEY CRÜEに対して、派手でお洒落なヴィジュアル・イメージを強調した。後にLAメタルの代名詞となるカット・シャツというスタイルを確立したのも、彼らである。

上記2バンドと、QUIET RIOT、DOKKENなどのスマッシュ・ヒットで、シーンへの注目度が高まった83〜84年頃、後続のARMORED SAINT、GREAT WHITE、HELLION、KEEL、LETCHEN GREY、LETHER WOLF、LIZZY BORDEN、MAX、HAVOC、SHARKS、W.A.S.P、WITCH、らが登場し、クラブ・シーンが盛りあがると、メジャーのレコード会社の青田買いが始まり、84、85年にムーヴメントは絶頂期を向かえ、ICON、

BLACK N'BLUE、STRYPER、ROUGH CUTT、KING KOBRA、WHITE SISTER、MALICE、WORRIOR、らがデビューを果たした。

この84、85年というのは、ＬＡメタルムーヴメント出身のバンドたちの来日ラッシュの時期であり、W.A.S.P.、BLACK'N BLUE、QUIET RIOT RATT、STRYPER、MÖTLEY CRÜE、DOKKEN、KEEL、ROUGH CUTTらが来日し、女性ファンを巻き込み、ハード・ロック、ヘヴィー・メタル入口を急増させた。

そして、86年、最後の大物といわれたＰＯＩＳＯＮのデビューの後に続くバンドは途絶え、87年のGUNS N'ROSESを機に、ストリート・ロックン・ロール勢にシーンの流れを奪われた形となり、シーンは衰退の一途を辿る。

５．シーンの衰退と終焉

こうして80年代中期、一気に盛り上がりを見せたＬＡメダルも、87年頃を機に急降下した。この原因は一体何だったのだろうか。

それは、今まで見てきたように、ＬＡメタルのムーヴメントの性質によるところが大きい。このムーヴメントは音楽ムーヴメントでありながら、それ以外のところに大きな比重を置いてきた。また一気に巻き起こったブームであったことから、肝心な音の方に目が向けられることは少なかった。音の方も、それなりのクオリティーと個性を持っていたが、アルバム全体の質は平均的で、印象的な曲は実は数曲にすぎない。そして、このムーヴメントがクラブ・シーンから巻き起こったことにも起因するのだが、何年かのクラブ活動中のほんの数曲にすぎないのに“良い曲”に目を付けられて、青田買いの対象になり、アルバムをリリースしたものの、一枚目で使いきってしまい、二枚目が続かない、というパターンも多かったようだ。このことは日本で80年代の後半に起こったバンド・ブームにも同じ事がいえ、結局良い音楽を供給しきれなかったムーヴメントは人々に見離されていった。

更に、80年代後半のクラブ・シーンの変容というのもムーヴメントが下火になった大きな理由である。80年代末、クラブはアルコールを売れなくなり、ペイ・トゥ・プレイ・システム（プレイするのに金がかかる。）の導入や、フライヤーと呼ばれる広告のばらまきの禁止や、警察による午前２時閉店の徹底で、華やかさを失い、老舗クラブは閉店していった。そして、バンドはプレイする場と、客を失いブームは失速していく。

その外に、ロサンゼルスという土地柄も影響していた。ＬＡメタルのムーヴメントが起こると、本気でやる気と実力のある人々以外にも、成功したいという思いの一方で、単に仕事嫌いである、ファッション感覚で急創りのバンドも、温暖で、路上生活も楽、しかも、酒と女に不自由しないロサンゼルスに現実逃避的に集まってきた。だから、実力が伴わないのに、ブームのせいで、運良く成功を収めたので後が続かない、というパターンも存在した。

そして、ＬＡのシーンはどんどん冷えていき、80年代の終わりとともに、絶滅した。

６．検証ＬＡメタル（STRYPERにみるＬＡメタル）

こうして、ブームは終わりを迎えた。ここまで、ＬＡメタルという現象の一般像をみてきたわけだが、具体的なバンドに当てはめると、どのような軌跡を辿ったのか、ここで見てみたい。そこで、私は、ＬＡメタルの典型的バンドSTRYPERを例にとりあげて、ここまで見てきた特徴を検証してみたい。

まずは、このバンドの歴史を追ってみよう。

このバンドも多分に漏れず、カリフォルニア州でROXX REGINEという名前で結成された後、クラブ・サーキットを行い、改名、1984年ENIGMAと契約し、「THE YELLOW AND BLACK ATTACK」をリリースする。もともと、このアルバムは自主制作で、それが輸入盤というかたちで日本には入り、注目され、本国よりも先に、日本のSONYと契約していた。このバンドが、多くのバンドと異なる点は、クリスチャン・バンドであった、ということである。バンドは、黄色と黒のストライプの衣裳に身を包み、聖書をステージから投げるという何とも“ＬＡメタル的な”派手な活動で、注目をあつめる。

1985年、50万枚以上を売り上げ、50週以上ビルボード・トップ200以内にいた最初のフルレングス・アルバム「SOLDIERS UNDER COMMAND」をリリースしたあと、1986年、トップ40アルバムにして、プラチナム・アルバムの２枚目の「TO HELL WITH THE DEVIL」で一気に勢い付く。ヒットしたパワー・バラード“HONESTLY”はＭＴＶでナンバー・ワン・リクエストになる。この２枚が彼らの絶頂期である。

1988年、「IN GOD WE TRUST」をリリースした頃から、彼らの活動は、低迷をはじめる。シングル曲“ALWAYS THERE FOR YOU”はそれなりのヒットとなり、アルバムも150万枚以上売れるが、90年代に向かって、緩やかな下降線を描きはじめる。

そして、このころ、所属レコード会社が倒産し、思うような活動がとれなくなる。４枚目、「AGAINST THE LAW」を1990年にリリースするがゴールドしかとれずじまい。時代の変化を察知してか、今まで貫きとおした、黄色と黒の衣裳を止め、地味なものをみにつけ、ロックン・ロール色のつよい楽曲をつくるも、ファンの支持は得られず、1991年解散に至る。

このようにまさにＬＡメタル的バンド、STRYPERが音楽的、ルックス的には先に見たＬＡメタルの特徴にどれ程当てはまるのかここでは見てみよう。

Ⅱの３と照らし合わせて見てほしい。①で述べられた音楽的特徴のほとんど全て、②に述べられたルックスについては全ての特徴を、このバンドが兼ね備えていることを、証明するのが次に載せる図であり、文末に添付された写真である。

音楽的に該当しない特徴は、メロディアスなヴォーカル・ラインと、露出の多い女性をヴィデオに出演させなかった点である。これは、彼らがクリスチャン・バンドであることによる、布教の必要性と道徳観によるものなのではないだろうか。

次の図は、彼らの大ヒット・アルバムでもっともＬＡメタル色の強い、２枚目のフル・アルバム、「TO HELL WITH THE DEVIL」を例に取り上げて、①

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
(a)		○	○	○	×	×	×	○	×	×	○
(b)		△	△	△	×	○	×	△	○	×	○
(c)		△	△	△	×	△	△	△	△	×	△
(d)		○	○	○	×	○	△	○	○	×	○
(e)		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(f)		×	○	×	○	×	○	○	×	○	○
(g)					○					○	
(h)		○	○	○	×	×	○	○	×	○	×
(i)		○	○	○	×	×	○	○	○	○	○
(j)		×	○	×	○	×	×	○	×	○	×

○ーぴったりだ　△ーそういえないことはない　×ー全然違う

を検証したものである。縦軸は特徴の番号、横軸はトラック数を表す。なお、トラック１は、ＳＥであるため、はぶく。

この図をみてわかるとおり、特に全ての曲が３～４分のコンパクトな曲であることに注目して考えてみると、この時代のＬＡメタルのバンドたちがMTV、ラジオで、流してもらえることを重視していたことがわかる。また、10分の８の曲で、タイトルをコーラス部に持ってきているが、これもヒットを狙うために、曲のタイトルをいちばん盛り上がったところで連呼し、おぼえさせる戦略なのではないか。ここでも、アメリカに集まる人の成功欲の強さ、商業主義が垣間見られる。

Ⅲ．拠点がロサンゼルスであったことの必然性

今まで見てきたようなＬＡメタルであるが、このムーヴメントが他の街ではなく、ロサンゼルスで起こったことの必然性について考えてみたい。

１．ロサンゼルス

まず、このムーブメントを生み出した街、ロスとはどんな街なのか？少し調べてみた。

ロサンゼルスはアメリカ、カリフォルニア州南部のニューヨークに次ぐ大都市圏人口をもった商工業都市。気候は年間325日が晴天の、地中海式気候。この恵まれた風土が、今日の繁栄を築いた。

産業的には、全米一の工業地帯の中心であり、主軸は航空、通信、コンピュータ、自動車などで、各社の主力工場、研究所が集まり、防衛用軍事費も全米一。頭脳産業も多く、ここで作られた製品は、ロング・ビーチ港、ロサンゼルス港を通し、流通する。両港あわせての取り扱い量は、太平洋岸最大で、太平洋経済圏との関係は密接である。

1908年から、ハリウッド中心に始まった映画産業は急成長し、乾燥した気候と、変化に富む風景が、フィルム産業と、映画撮影に適していたこともあり、40年代には巨大映画会社が、年間400本もの映画を作り、ロサンゼルスの名を世界に広める。テレビ時代になると、テレビ用映画の製作の中心地となる。

航空交通でも重要な拠点であるが、自動車なしでは生活できない都市としても有名で、郊外型の広大な住宅をもつ生活様式は、カリフォルニア・ドリームとして、アメリカ人のあこがれとなる。一方では、自動車公害の都市の先駆となったここでは、公共大量輸送機関が必要なのだが、広大で、低密度のため、実現は難しく、市内交通機関のない大都市である。

人種・文化的にはかつて、スペイン・メキシコ領だったことから、スペイン系や黒人が多い他、太平洋地域への玄関であるから、東洋系も多く、人種問題は後を絶たない。裕福な白人の住む地域と、ワッツ地域など貧しい黒人地域は、きっぱりとわかれている。

２．ＬＡメタルとロサンゼルス

なぜ、このような街でこのムーヴメントおきなければならなかったのか。私は今まで見てきたことから、次のような必然性をいくつかみつけた。

①車社会とラジオ

ここで見逃してはいけないのが、ロサンゼルスの高度車社会と音楽メディアとしてのラジオ

の関係である。車を運転しながらラジオを聞く。このなんでもない日常の風景がこのムーヴメントと大きな関わりを持っている。

ロサンゼルス近郊に数多くのＦＭステーションがあるが、その中でもこのムーヴメントに大きな影響を与えたのが、ハード・ロック、ヘヴィー・メタル専門局、ＫＮＡＣの存在である。付け加えておけば、現在は専門局ではない。

69年に開局したこの局は、ポップスを流していた時期もあるが、ムーヴメントの絶頂期85年頃から専門局に戻る。当時、ティッパー・ゴア中心に有害音楽撲滅運動（ＰＭＲＣ）で多くの局でハード・ロック系の音楽のオン・エアは自粛されていた。（オジー・オズボーンの曲を聞いた子供が音楽のせいで自殺したとか、言い掛り的な運動であった。）しかし、この時期にも、ＫＮＡＣはこの手の音楽を流しつづけ、ムーヴメントの成功の手がかりとなった。今の日本の音楽状況からも解ると思うが、ある曲のヘヴィー・ローテーションは確実にヒットを呼ぶ。例えば、ＡＶＥＸ系の小室哲哉プロデュースのアーティストの曲のドラマのテーマ曲化、メディアへの多露出の結果の莫大なセールスがそれである。

また、同局は未契約のクラブ・バンドのサポートにも余念が無く、デモ・テープの放送、ＣＤ化、ライブの機会を与えることなど、シーンに多大の貢献をした。また、ロサンゼルス近郊のライヴ情報、リムジン情報などの草の根活動も行った、この局の意義は大きい。

②ショウ・ビジネスの中心地、ロサンゼルス

80年代、メジャー・レーベル、マネージメント・オフィスがロサンゼルスに集中した。そのため、成功を求める地方のローカル・バンドは、クラブの集中する、ロサンゼルスのサンセット・ストリップ界隈に移動した。ロキシー、ウイスキー・ア・ゴー・ゴー、ギャザリーズなどの有名クラブの他、業界関係者、ミュージシャンが集うレストラン、レインボウがあるこの界隈では、運が良ければ、業界関係者の目に留まることもあり、このへんをうろつくことは、当時ファッショナブルであったという。このようなレーベル、マネージメント・オフィスのロスへの集中も、このムーヴメントの一因となっている。

また、これらのレコード会社の人々にとって、派手でグラマラスで、ポップだというショウ・ビズ的な大衆ウケが望めるＬＡメタルのアーティストたちは、商業的思惑の対象となった。うがった見方をすれば、彼らのポップな音楽性は契約のためで、契約後本来の音楽性を取り戻し、一般大衆に捨てられて、ブームが衰退していったとも考えられる。成功を求め、ロスに移った若者たちと、業界側の商業的欲求の合致がこのムーヴメントを起こした。

③ＭＴＶの存在

また、ヴィジュアル的に魅力的なＬＡメタルのアーティストは、音楽専門テレビ局（ＭＴＶ）の格好のターゲットにも成り得た。

80年代ＭＴＶは、音楽産業にプロモーション・ヴィデオのヘヴィー・ローテーションという形で大きな影響を与えた。ＭＴＶは普通コンサートにいかない低年齢層や、ロック初心者にもテレビを通じてアピールし、ポップで洗練されていくＬＡメタルのアーティストのアルバムの高セールス、ムーヴメントの拡大に貢献した。これもまた、そこがロスでなければならなかった理由であろう。

④クラブ・シーンの隆盛

先にも述べたが、このロサンゼルス・サンセット・ストリップ界隈のクラブはムーヴメントを根底から支えていた。

クラブは、レコード会社、マネージメント、パブリシスト・オフィスの多いところにあり、業界人にとって新人発掘の場となり得た。だから、若者たちはデモ・テープを作り、写真を撮り、クラブにブッキングしてくれるように、売り込み活動をする。動員の増加に従い、サポートからヘッド・ライナーに、平日から週末へとライブはずれ込み、レコード会社やマネージメントの注目を受けるようになり、やがて、メジャー・デビューに至るものも出る。

また、これらのクラブ等は18才以下、21才以下の入場を禁じていた。そのため、クラブへの出入り自体が、華美で危険なイメージを持っていた。これもまた、ムーヴメントに人々を引き付けたのではないだろうか。

バンドは、無料情報誌『BAM』、『LA WEEKLY』にライヴ情報を載せ、フライヤーを配りまくった。このデザインを専門に行なうグラフィック・デザイナーや、フォトグラファー、ヘア、メイクアップ・アーチスト、スタイリストもでてきて、ＬＡメタル・ムーヴメントは単なる音楽ムーヴメント以上のものを呈していた。

⑤気候的要因

貧しく、着のみ着のままの若者たちが、飛びこんでいきやすい地中海式の気候。泊まるところがたとえなくても、路上生活が可能で、服も、Ｔシャツ一枚でよく、金がかからない。実際、そうしてきたミュージシャンは意外と多く、ＦＡＩＴＨ　ＮＯ　ＭＯＲＥのメンバーなどがそうだ。だからこそ多くの若者が、ここに集まり、ムーヴメントが起こせた。

⑥産業都市、ロサンゼルス

他のハード・ロック、ヘヴィー・メタルにはあまり見られない、商業性が、このムーヴメントにはある。大ヒットの連続は、産業化されているこの街で、音楽までもが産業化されてしまった結果ではないだろうか。ＬＡメタルの特徴である形にはまったファッション、音。これは、需要のある同じ類の音楽を量産するために、産業側が、意図的に作り上げたスタイルなのではないか。こうすれば売れると。

⑦カリフォルニア・ドリームの体現としてのＬＡメタル

貧と富が併存し、カリフォルニア・ドリームにあこがれて、または、産業都市に職を求めてやってくる貧しいものが絶えない地、ロサンゼルス。ＬＡメタルもまた、この地に宿るカリフォルニア・ドリームを体現するムーヴメントだったのだ。華やかなルックス、きらびやかな音楽、しかしどこかいかがわしさもある。これは、成功をもとめ、ここにやってきた成り上がりのミュージシャンだからこそ醸し出せるものなのではないか。貧と富、ゴージャスさと品の悪さ。この二面性が、ＬＡメタルにもあるのだ。そして、これこそが、ＬＡメタルの魅力なのだ。そして、成功を求めて、人が集まるＬＡだからこそこんな音楽を生み出せたのだ。そして、そんな音楽だからこそ、日々成功に憧れるアメリカ人、そして世界の人々の間にムーヴメントを起こせたのではないか？

このように、ムーヴメントはロスで起るべくして起こったのである。何事にも理由があるように、地域的音楽現象もわけあって起こったのだ。ＬＡメタルの地域的偏重の理由は今まで述べてきたとおりである。こうして、音楽に地域的偏重が出てくるのはやはり、音楽が、それが作り出されたバックグラウンドである文化、社会を確実に反映しているからといえる。

Ⅳ．旧ＬＡメタル勢の復活

今、ここにⅡの５．で述べたような理由により一度は終焉を迎えたＬＡメタルのバンドたちが、最近次々と復活を遂げている。

社会状況の陰りを反映してか、80年代末になると現実的なストリート色の強い、ロックン・ロール系、さらに90年代に入るとグランジ、オルタナティヴ・ロックがロック・シーンの中心をしめ、時代にもはやそっぽを向かれた、非現実的でバブリーなＬＡメタルは影をひそめた。しかし、アメリカの経済が好転を見せている今、こうして、ＬＡメタルのアーチストたちがシーンに戻ってきているのは単なる偶然には思えない。まるで10年前、20年前と同じように今は流行の過渡期にあるのではないか。60年代の終わりにはハードロックが、70年代の終わりには、パンクが、80年代の終わりにはオルタナティヴ・ロックがやってきているではないか。時代は繰りかえすのか？音楽はやはり社会の鏡となる文化現象なのだろうか？

復活をとげた、RATT、DOKKEN、MÖTLEY CRÜE、W.A.S.P.らのアーチストは、陰りのある、というよりも、暗くよどんだ90年代の音楽を通過したためか、それとも単に成功したいだけのため、流行を追ったのか、華やかさを失った、現代的な音楽、見かけとなっている。

はたして、今のファン、シーンが求めているのは時代になびいた彼らなのであろうか。ここ数年間、オルタナティヴを聞き続け、食傷気味のオーディエンスは、経済情況が好転しつつあるアメリカはもっと華やかなものを求めているのではないだろうか。これは、元祖メイン・ストリーム・ハード・ロックのＫＩＳＳのオリジナル復活ツアーが大成功をおさめていることからもわかる。

もしかして、数々の、十年毎に繰り返される流行の変化は、メディアが故意に作り上げているのかもしれない。メディアはひとつのものを流行らせて、何年にもわたって与え続けて、飽きたころになるとまた、新鮮なものを与えているのではないだろうか。すると、メディアに我々はおどらされているのではないか？我々はもっと、自分の感覚に正直にならなければならないのではないだろうか。

最近の流行に流されやすい、制服でもないのにみんなでルーズ・ソックスはいて、ラルフ・ローレンのベストをきた女子高校生を見ていると、日本の先行きが不安になる。確かに、人と同じことをしていれば安心感があるかも知れないけど、ではあなたたち、みんなが死んだら、あなたも死ぬのですか？と聞きたくなる。あるムーヴメントの浸潤は、これと同じことではないか。

こうして、みなが、同じことをはじめるとますます違うことしている人間は、うきあがり、排除されてしまい、行き場を失い、アウト・サイダーになりきれない、弱いものは自らの命を絶つ。現代の社会の歪みが、こんな音楽の話からもうかがえる。

安易な流行へのなびき、時代の後追い。ＬＡメタル・ムーヴメントの負の遺産を、その創始者の自分たちが逆にかぶっていることを本人達は気付いているのか。やはり、ロックは弱者の音楽なのか。

今回はこのように、音楽は単に音の塊として楽しむ以外にも、社会的にみて楽しめる重要な文化、社会現象のひとつであることを、改めて思い知らされたような気がする。音楽の教科書へのロック、ポップス曲の掲載が行なわれている今、単にその楽曲を技術的に授業の材料として使うのではなく、文化的、社会的に考えてみるのも、良い勉強になるのではないだろうか。

やはり、音楽はおもしろい。

しかしまた、このような音楽を生み出した地域、時代も面白い。このＬＡメタルを生み出した、同じアメリカで、同じくコンパクトな文化現象、文学現象ミニマリズムが起こっている。はたして偶然か？　私にはこれが偶然には思えない。音楽はそのバック・グラウンドを確実に反映するのだから、当然といえば当然の現象なのである。やはり、80年代のアメリカでしかありえなかった現象なのだ。この短さを産みだしたものは何か？コマーシャリズムか？それ以外にも沢山の原因があげられるはず。そしてそれが意味することはいったいなんなのか？

地域と音楽現象、さらには時代を含むおおきなバック・グラウンド。私の求めるテーマは広がりつつあるようだ。

参考文献

１．酒井康他編：『ＢＵＲＲＮ！1993年４月号』シンコー・ミュージック、1993年
２．平野和祥他編：『炎1997年７月号』シンコー・ミュージック、1977年
３．清水均編：『現代用語の基礎知識』自由国民社、1997年
４．相賀徹夫編：『日本大百科全集24』小学館、1988年

☆ＬＡ今昔物語(80年代と90年代)☆
左　　右

↑ ①Mötley Crüe(80年代)
参考文献１のp.43より

②Mötley Crüe(90年代)
『炎』'97、p.36より

①と②を比べればわかるとおり、華かな80年代のコスチュームが90年代にはずいぶんと時代を反映しておちつく。

③Stryper(80年代)
参考文献１　p.43より

④STRYDER(90年代)　『炎』94年、No2 p.142より

↑ ⑤Ratt(80年代)　参考文献１ p.43より

→
⑥Ratt('90's)
『Burrn!』
1997.7月号
p.19より
左はじの
お兄さんが
今では
このあり様。

☆その他のバンド達のＬＡメタル時代☆

↑ ①Poison　超ＬＡメタル的ルックス。
参考文献１ p.43より

②Rough Cutt ⟶ ①と同じ文献より

←
③
DOKKEN
今年、地味に
なって再来日
をはたすが、
今イチもりあ
がらず。

④ →
BLACK'N
BLUE
左から２番目
の人はブーム
が去ってポル
ノ男優に。

『炎』'94 No.2 p.143より

☆ＬＡメタル作品集(参考文献１　p.46～47より)☆
重要作品にはマークしておいた。

GET UP, GET HAPPY/ANTIX

1984年　(廃盤)
B①の"Caroline"を聴くだけでも価値のあったANTIXのデビュー・ミニ・アルバム。ドン・ドッケンがプロデュースを手掛けているが、DOKKENとはひと味違うファンキーでポップな曲は当時としては結構新鮮だった。

LAY DOWN THE LAW/KEEL

1984年　(廃盤)
ロン・キールがイングヴェイ・マルムスティーンと共に在籍していたSTEELER解散後に結成したKEELのＩst。録音のバランスも悪く、全体的に荒削りだが、LA METALの典型的なサウンドを聴くことができる。

ARMORED SAINT/ARMORED SAINT

1983年　(廃盤)
個性的な衣装と硬派なサウンドで評価の高かったARMORED SAINTだが、このＩstミニ・アルバム・リリース後、メジャーからデビューを果たす。Voは、現ANTHRAXのヴォーカリスト、ジョン・ブッシュ。

READY TO STRIKE/KING KOBRA

1985年　(廃盤)
カーマイン・アピス、ジョニー・ロッド (ex.W.A.S.P.)、ミック・スウェイダ (現BULLETBOYS) といったメンバーで構成されたKING KOBRAのＩst。疾走感溢れるドラマティックなサウンドは、非常に印象的。

BLACK'N BLUE/BLACK'N BLUE

1984年　(廃盤)
親しみやすい独特なクテノリ・ナンバーで日本でも人気が高かったBLACK 'N BLUEのＩst。ヴォーカルのジェイミー・セント・ジェイムズとギターのトミー・セイヤーは昨年COLD GINのメンバーとして来日している。

GIVE'EM THE AXE/LIZZY BORDEN

1984年　(廃盤)
４曲と収録曲は少ないが、RAINBOWの"Long Live Rock'n'Roll"のカヴァーも入っており、内容は濃い。斧を持っての過激なライヴ・パフォーマンスも話題となるが、リジーを中心とした演奏力もなかなか安定感があった。

BREAKING THE CHAINS/DOKKEN

1982年　(廃盤)
ドイツで活動していたドン・ドッケンがLAから、ジョージ・リンチ、ミック・ブラウン、フォアン・クルーシェを呼んで作ったＩstアルバム (ドイツ盤)。後に「Elektra」からリリースされるものとは内容が一部違う。

NON STOP ROCK/LONDON

1986年　(廃盤)
'79年に結成され、その昔はMÖTLEY CRÜEのニッキー・シックスやW.A.S.P.のブラッキー・ローレスも在籍していたLONDONのＩst。サウンドはワイルドでチープなR&Rといった感じ。ドラマーはフレッド・コウリーが担当。

OUT OF THE NIGHT/GREAT WHITE

1983年　(廃盤)
ドン・ドッケンとマイケル・ワグナーがプロデュースしたGREAT WHITEのデビュー・ミニ・アルバム。５曲入りでＡＢ面とも同じ曲が収録されているが、このころからジャック・ラッセルのヴォーカルは光っている。

IN THE BEGINNING.../MALICE

1985年　(廃盤)
ロブ・ハルフォードばりのヴォーカルとJUDAS PRIESTを彷彿とさせる重厚なサウンドが話題を呼んだが、商業的には成功しなかった。硬派な音作りは、他のLA METALバンドとは明らかに違うサウンドを形成している。

HELLION/HELLION

1983年　(廃盤)
女性ヴォーカル、アン・ボレインをフィーチュアしたHELLIONのＩstミニ・アルバム。ブリティッシュ・メタルよりのサウンドと女性とは思えぬ力強いヴォーカルは迫力充分だが、どの曲もパッとしない。

TOO FAST FOR LOVE/MÖTLEY CRÜE

1981年　(廃盤)
自主制作で作られた幻のＩstのちに「Elektra」からリリースされるリミックス・ヴァージョンではB②の"Stick To Your Guns"がカットされており、同時に荒々しさも消えてしまっている。

ICON/ICON

1984年　(廃盤)
アリゾナ州フェニックスからLAに活動の場を移し、見事メジャーからデビューを飾ったICONのＩst。スケールの大きいドラマティックなサウンドが魅力であったが、品のない歌声のヴォーカルが今ひとつという声も……。

DON'T TAKE NO FOR AN ANSWER/ODIN

1985年　(廃盤)
LAのクラブでは評判が高かったが、結局ブレイクすることなく終わったODIN。ヒステリックなランディ・ＯのVoと正統的なサウンドのマッチングが妙なバンドだった。Ｇのジェフ・ダンカンはその後ARMORED SAINTへ。

MADE IN HEAVEN/JAG WIRE

1985年　(廃盤)
元STEELERのリック・フォックス率いるSINに在籍していたリック以外のメンバーによって結成されたJAG WIRE。SIN時代の名曲"On The Run"も入っているが、他にもポップで親しみやすい曲を多数収録。

LOOK WHAT THE CAT DRAGGED IN/POISON

1986年　ソニー CD 25DP-5023
ド派手なメイクとグラム・ロック調のサウンドでLAのクラブで爆発的な人気を誇っており、日本にもすぐに来日したが、演奏が下手ということだけが評判となる。しかしその後の大躍進ぶりは知ってのとおり。

METAL HEALTH/QUIET RIOT

1983年　ソニー CD 25DP-5226
②の"Cum On Feel The Noi ze"のシングル・ヒットを機に、LA METALと言われたバンドの作品の中で一番の大ヒットとなったが、ヴォーカルのケヴィン・ダブロウの口の悪さが祟って、その後人気も急降下する。

THE YELLOW AND BLACK ATTACK/STRYPER

1984年　（廃盤）
ライヴ中にステージから聖書を配ることでも知られたクリスチャン・バンドのデビュー・ミニ・アルバム。ここに収録された6曲にクリスマス用のシングル曲2曲をプラスしたものが、後にリリースされている。

RATT/RATT

1983年　MMG CD 28XD-706
RATTがメジャー・レーベルと契約するきっかけとなる『Time Coast』からリリースされたⅠstアルバム。後に『Music For Nations』盤もリリースされたが、こちらには"You're In Trouble"がⅠ曲プラスされていた。

FIGHTING FOR THE EARTH/WARRIOR

1985年　10 CD DIXCD 9
日系人ギタリスト、トミー・アサカワが参加していたことでも、話題になるが、"Fighting For The Earth"のⅠ曲だけで、消えていってしまう。サウンドはLAシーンにしては珍しく、ブリティッシュ系のヘヴィな音を出していた。

ROUGH CUTT/ROUGH CUTT

1985年　ワーナー CD WPCP-4029
ポール・ショーティノのソウルフルなヴォーカルを中心とした渋めのサウンドは、LA METALの中では最も完成されていたが、2ndアルバムを出した後、ポールが脱退。バンドも残念ながら解散してしまう。

ANIMAL(FXXK LIKE A BEAST)/W.A.S.P.

1984年　（廃盤）
デビュー前からこれほど注目されたバンドはいなかっただろう。このシングル発売に向けて、日本の輸入盤店でも予約が殺到したほどで、W.A.S.P.もこれを機にメジャーと契約。昨年新しいメンバーで来日公演も行なっている。

ALTAR EGO/SHARKS

1983年　（廃盤）
録音状態は今一つだが、ハードなロックン・ロールが楽しめる、SHARKSのⅠst。その後、バンド名をSHARK ISLANDに変えて、インディーズからⅠ枚アルバムをリリースし、メジャー・デビューも果たしている。

U.S.METAL

1981年　（廃盤）
マイク・ヴァーニーが、クラブで活動する未契約のバンドを集めて作ったオムニバス・アルバムのVol.Ⅰ。このアルバムにはKEELが参加しているが、LAに限らず東海岸のバンドも収録されており、クオリティは様々。

SIN/SIN

1983年　（廃盤）
元STEELERのリック・フォックス率いるSINのデビュー・シングル。A面の"On The Run"Ⅰ曲で有名になるが、バンドは分裂。その後もリックはバンド活動を続けていたようだが、今はどこで何をやっていることだか……。

METAL MASSACRE

1982年　（廃盤）
RATT、BLACK 'N BLUE、MALICE、METALLICAなどが収録されたオムニバス・アルバムのVol.Ⅰ。6年の間に7枚がリリースされるが、数を重ねるにつれ、スラッシュ系のバンドが多くなり、質は下がる一方だった。

STEELER/STEELER

1983年　Shrapnel CD SH-1007cd
STEELERへの参加が目的でアメリカへやって来たイングヴェイ・マルムスティーンだが、このアルバム・レコーディング終了後にロン・キールとの不仲が原因で脱退。ALC、TRAZZに参加する。ロンはKFCL結成へ動きだす。

LA'S HOTTEST UNSIGNED ROCK BANDS

1983年　（廃盤）
ジェイク・E・リーが参加していたROUGH CUTTの2曲が収録されたオムニバス・アルバム。この当時のROUGH CUTTには、元RATTのジョーイ・クリストファニリ〈b〉、後にDIOに参加するクロード・シュネル〈key〉もいた。